

言葉の向こうに

夜中に、はっと目が覚めた。すぐにベッドから起き出してリビングへ降り、パソコンの電源をつける。画面の光が部屋の片隅にまぶしく広がった。

私は、ヨーロッパのあるサッカーチームのファン。特にエースストライカーのA選手が大好き。ちょうど今頃、向こうでやっている決勝の試合が終わったはず。ドキドキしながら試合結果が分かるサイトをクリックした。

「やった、勝った。A選手、ゴール決めてる。」

思わず声が出てしまった。大声出したら家族が起きちゃう。そっと一人でガッツポーズ。

みんなもう知ってるかな。いつものように日本のファンサイトにアクセスした。画面には、「おめでとう」の文字があふれてる。みんな喜んでる。うれしくて胸が一杯になった。私もすぐに「おめでとう」と書き込んで続けた。

「A選手やったね。ずっと不調で心配だったよ。シュートシーンが見たい。」

すると、すぐに誰かが返事をくれた。

「それなら、観客席で撮影してくれた人ののが見られるよ。ほら、ここに。」

「Aのインタビューが来てる。翻訳も付けてくれてる。感動するよ。」

画面が言葉で埋め尽くされていく。私は夢中で教えてくれたサイトを次々に見に行った。

学校でもサッカーの話をするけど、ヨーロッパサッカーのファンは男子が多い。私がA選手をかったいいよね、って言っても女子同士ではあんまり盛り上がりがない。寂しかったけど、今は違う。ネットにアクセスすれば、ファン仲間が一杯。もちろん顔も知らない人たちだけ。今この瞬間、遠くの誰かが私と同じ感動を味わってる。なんか不思議、そしてうれしい。気が付くともうすぐ朝。続きはまた今夜にしよう。

今日は部活の後のミーティングが長かった。家へ帰ると、食事を用意して待っていた母に、「ちょっと待ってて。」

と言って、パソコンに向かった。優勝後のインタビューとか、もっと詳しく読めるかな。楽しみ。

「Aは最低の選手。あのゴール前はファールだよ、ずるいやつ。」

聞いた画面から飛び込んできた言葉に、胸がどきっとした。何、これ。

「人気があるから優遇されてるんだろ。大して才能ないのにスター気取りだからな。」

ひどい言葉が続いてる。読み進むうちに顔が火照ってくるのが分かった。

怒りで一杯になって夢中でキーボードに向かった。ファンサイトに悪口を書くなんて。

「負け惜しみなんて最低。悔しかったら、そっちもゴール決めたら。」

すると、また次々に反応があった。

「向こうの新聞にも、Aのブレイが荒いって、批判が出てる。お前、英語読めないだろ。」

「Aのファンなんて、サッカー知らないやつばかり。ゴールシーンしか見てないんだな。」

「Aは、わがまま振りがチームメイトからも嫌われてるんだよ。」



必死で反論する私の言葉も、段々エスカレートしていく。でも絶対負けられない。

「加奈子、いい加減にきなさい。食事はどうするの。」

母の怒った声。はっと気付いて時計を見た。もう一時間もたってる。

「加奈ちゃん、パソコンは時間を決めてやる約束よ。」

ずっと待たされていた母は不機嫌そうだった。

「ごめんごめん。ちよっと調べてたらつい長くなっちゃって。」

「そうなの。なんだかこわい顔してたわよ。加奈ちゃん、こっちに顔を向けて話しなさい。」

「はい、分かりました。ちゃんと時間守ります。お母さんの御飯おいしいよね。」

そう言いながらも、私の頭はA選手へのあのひどいコメントのことで一杯だった。

「まったく調子いいんだから。でもね、ほんとかどうか目を見れば分かるのよ。」

私は思わず顔を上げて母を見つめた。その表情がおかしかったのか、母がぶっと吹き出した。つられて私も笑った。急におなががすいてきちゃった。

食事の後、サイトがどうなっているか気になって、恐る恐るパソコンを開いてみた。

「ここにA選手の悪口を書く人もマナー違反だけど、いちいち反応して、ひどい言葉を向ける人、ファンとして恥ずかしいです。中傷を無視できない人はここに来ないで。」

ええーっ。なんで私が非難されるの。A選手を必死でかばってるのに。

「A選手の悪口を書かれて黙っていろっ言うんですか。こんなこと書かれたら、見た人がA選手のことを誤解してしまうよ。」

「あなたのひどい言葉も見られています。読んだ人は、A選手のファンはそういう感情的な人たちだっと思ってしまいますよ。中傷する人たちと同じレベルで争わないで。」

なんで私が責められるのか全然分からない。キーボードを打つ手が震えた。

「だって悪いのは悪口書いてくる人でしょ。ほっとけっ言うんですか。」

「挑発に乗っちゃ駄目。一緒に中傷し合ったらきりがないよ。」

優勝を喜び合った仲間なのに。遠くの人などつながってるって、今朝はあんなに実感できたのに。何だか突然真っ暗な世界に一人突き落とされたみたいだ。

もう見たくない。これで最後。と、もう一度画面を更新した。

「まあみんな、そんなきつい言い方するなよ。ネットのコミュニケーションって難しいよな。自分もどうしたらいいかなって、悩むことよくある。失敗したなーってときも。」

「匿名だからこそ、あなたが書いた言葉の向こうにいる人々の顔を思い浮かべてみて。」

えっ、顔。思わず私はもう一度読み直した。そして画面から目を離すと椅子の背にもたれて考えた。

そうだ……。駄目だなあ。何で字面だけにとらわれていたんだろう。一番大事なことを忘れていた。コミュニケーションしているつもりだったけど。

私は立ち上がり、リビングの窓を大きく開け、思いっきり外の空気を吸った。

「加奈ちゃん。調べ物はもう終わったの。」

台所から母の声がする。

「調べ物じゃないの。すごいこと発見しちゃった。」

私は、明るい声で母に言った。

● 感じたこと、考えたこと。